サッカーの指導者及び指導内容に関する比較研究

――旧西ドイツと日本について――

永都 久典・田嶋 幸三*

緒 言

1968年のメキシコオリンピック銅メダルを最後に，サッカーの日本代表チームは大きな国際舞台での活躍から遠ざかっている。それとは逆に，少年サッカーの人口は伸びる一方で，日本サッカー協会第4種登録選手数を見てみると1977年には68, 950人であったのに対し，10年後の1987年には264, 617人へと増加している。同じく第4種登録チーム数を見てみると1, 867チームから7, 338チームへと増加している。さらに，1992年からのプロ化を考えると少年サッカーの人口は増加するものと考えられる。これは，日本サッカー協会の普及活動によるところが大きいが，テレビ・漫画などマスコミの影響も大きい。いくつかの日本のサッカークラブの活動を見たが，子供だけではなく親も熱心にサッカーに取り組んでいて，そこには，評判の進学塾と共通なものを感じた。スポーツの高度化，大衆化，低年齢化を背景に，チャンピオンはマスコミで脚光を浴び，サッカー選手に限らずスポーツ選手の社会的地位も高まり，スポーツ関連の職業分野も広がりつつある。スポーツクラブが評判の進学塾に似たようなものになることも無理からぬことである。しかし，これだけではなく，サッカーが少年達の心身の発育，発達に適したスポーツであることを見逃すことはできない。

小さい頃から多くの少年がサッカーを行うことは，サッカーの普及だけではなく，長い目で見ると代表チームの強化にもつながり，非常にプラスになると思われる。が，その反面マイナスになっていることもあるのではないだろうか。急激な選手の増加に指導者の数が伴わず，1人で何十人もの選手を指導したり，サッカーの指導に関する正しい知識を持たない人が指導するケースが少なくない。また，「公認上級コーチ」に対しては再教育を行っているが，少年サッカーなどの底辺を支える「リーダー」には行っていない。そのため，日本サッカー協会の方針を徹底できず，これらによる弊害も出てきている。

---

* 立教大学，Rikkyo Univ.

まず，一例としてスポーツ障害の問題が挙げられる。佐藤は，スポーツ運動中，１回かあるいはごく限られた回数の強い外力あるいは内部的作用によって起こる傷害をスポーツ外傷，思い当たる原因がなく競技生活の経過中にいつとはなくスポーツ運動を行うのにマイナス面の現れる場合をスポーツ障害としている[17]。中嶋らは，発育期のスポーツ障害の発生率をスポーツ種目別にみて，男子ではサッカー，女子ではバスケットと体操が多く，Osgood-schlatter 病は男子のサッカーに多いと述べている[12]。森本らも小学生サッカー選手を対象にした調査で，スポーツ外傷はほとんどみられなかったがレントゲン検査の結果20％の選手にスポーツ障害（膝蓋骨の異常所見）を認めている[10]。その他にも，大畠，鍋島らは，練習日数や練習時間が多いほどスポーツ障害が発生しやすいと述べている[15]。

また，身体の障害だけではなく〝心″の問題もある。バーン・アウト・シンドローム，〝燃えつき症候群″と訳される言葉が，少年スポーツの世界でも使われ始めている。もともとは高度な肉体的，精神的緊張を伴った仕事を強いられるビジネスマンが，長い間の働き過ぎのため活力を失い，さらには目標や理想までも失い，身も心もへとへとに擦り切れてしまった状態をいう。武藤は，特に子供の場合を取り上げ次のように指摘している。『未成熟な子供（特に小学生）に対して，競技成績を上げることを目的とした質・量ともに高い練習を長期間にわたって課すことで，子供にとってもともと楽しかったはずのスポーツがいやになり，やる気を全く失ってしまう。それぱかりか，勉強や日常生活などスポーツ以外のことも意欲を失ってしまう。』[11]

以上のように，野球で問題になった少年の「野球肘」のように，サッカーにおいても特有の障害や燃えつき症候群など，選手生命に関わる障害を少年期に受けてしまう可能性もある。すでにその犠牲となっているスポーツ少年達の例も少なくない。これらの問題を解決するには指導者に対しての教育が必要であると考えられるが，ただ知識を身につけるだけではなく，選手１人１人に目のいきとどく指導選手数や場所など環境の整備もしていかなければならない。これはこれから述べる技術・戦術の指導にもいえることである。

Heddergott は，『技術とは，プレッシャーのかかったゲームの状況下で，目的をもって身体とボールを支配する技能である。戦術とは，目的的，計画的に味方と敵の技術・コンディション・意志・戦い方を考慮し，勝利を得るための手段である。』[4] と述べている。このように，技術と戦術は深い関連にあることを理解して指導にあたらなければならない。旧西ドイツサッカー協会（以下 DFB とする）B―ライセンス講習会[16] では，ボール扱い・個人戦術（Pass and go！等）・キック・シュート・ゲームとサッカーの全ての要素を少年たちにバランスよく教えることが一番望ましい指導としている。Csanadi も，『技術と戦術を並行して教え込んでゆくことが最も大切なことである。』[3] と述べている。日本と旧西ドイツの少年達を比べてみると，ボール扱い（ドリブル，リフティング，引き技，等）において，日本の少年達の方が優れていると言われている。昭和48年，日本のトップクラスの少年サッカーチームが旧西ドイツに遠征し，全試合を大差で勝っ

て帰ってきたというニュースを記憶している。このチームに限らず，大串らの報告によると日本の少年サッカーの頂点に立つようなチームは，練習時間も多く，その中でもボール扱いにかける時間が長いようである。年齢及びサッカーのレベルが低いほど，ボール扱いやドリブルがうまい選手が目だち，チームの勝利にも貢献できる。しかし，中学，高校，社会人と年齢が増すほどに1対1のディフェンス力やカバーリングも高度になり，ドリブルだけでは思うようにできなくなってしまうと考えられる。そのときに，パス，ドリブルの選択やフリーランニングなど，ゲームで本当にやらなければならない個人戦術がしっかりしていないとゲームをコントロールできない。田中は，『現在までの体育におけるスポーツ教材が「技術」を教えること，技術獲得に偏重し過ぎて，その技術をいかに用いるかにかかる比重が少なかった。』[8] と述べている。ドリブル，ボールコントロール，リフティング等の練習は，目に見えて上達するのが自覚できるため，子供の達成欲求を充足させ，練習に対する良い動機づけとなると考えられる。しかし，基本的なボールコントロールなどを，少年時代に身に付けさせることの重要性もさることながら，それと同時にパスを出すタイミング，11人全員でプレーすることの戦術的指導も必要であると考えられる。旧西ドイツの代表選手であった Breitner は，『日本のユースは技術的には高いものを持っている。しかし，選手個人が自分自身のためにプレーしている。その場面で一番必要なプレーではない。旧西ドイツでは，小さいときから「勝利」が最終の目的だと教えられる。ボールを持った人が自分のためにプレーすると他の選手がついていけないのだ。旧西ドイツでは，1つのパスが出されたら，必ず自然と2～3人が助けに出る動きをする。』[2] と述べている。旧西ドイツでトップクラスの少年サッカーの試合を観戦した時，ドリブルのうまさにもましてダイレクトパスやスルーパスのうまさに強い印象を受けた。このように，旧西ドイツの少年達は，サッカーの基本となる要素をバランスよく教わっているように思われる。戦術的なことは大人になっても指導できる。子供の頃は，ボール扱いを中心に教えていけばいい，と述べる指導者もいる。しかし，大人になり理論的に分かることができても，実際の試合でそれが発揮できない選手を多く見てきた。

技術や戦術面での指導で，誤った指導をすれば，少年達は誤ったサッカーを覚えてしまうし，サッカー本来の楽しさ，素晴らしさをわからないままやめてしまう子供がいるかもしれない。Csanadi は，『実際の経験では，現在のハンガリーにおける大勢のエージ・グループは，若い人たちの肉体的発達の特性に必ずしも忠実に従ってトレーニングをおこなっていないようである。これが多くの〝天才児たち〟が非常に早くその栄光の座から滑り落ちたり，ある選手たちが非常に完成が遅れる理由ではないか，と実際考えられる。』[3] と述べている。日本でも同じことが言える。つまり，素晴らしい才能を持った選手の芽を摘んでしまっているのである。

20年間の日本サッカーの低迷を考えると代表クラスのチームの強化だけではなく，少年サッカーの底辺の指導から考え直す時期にきているのではないだろうか。そこで，常に世界サッカーのトップクラスに位置している旧西ドイツ及び日本の指導者，少年選手（10歳～12歳）を以下の観

点から比較検討し，それにより，日本の問題点を探り，今後，実際の指導場面に役立たせることを本研究の目的とした。

調 査 方 法

1. 調 査 対 象

本研究では，旧西ドイツと日本の少年サッカーの指導状況を比較するため，旧西ドイツ４チーム，日本18チームの計22チームを調査の対象とした。日本は1986年８月21日から８月24日，千葉県千倉町で行われた少年サッカーフェスティバル出場12チーム，茨城県桜村，谷田部町にある６つの小学校のサッカークラブ，茨城県取手市にあるクラブチームの選手及び指導者とした。旧西ドイツはケルン近郊の４つのサッカークラブ，ケルン郊外の地域選抜チームの指導者及び選手，また，その他に旧西ドイツサッカー協会（以下 DFB とする）主催の 1986 年コーチングコース (Fussballehrerlergang) 参加者の中の少年サッカー指導経験者，旧西ドイツ Mittelrhein サッカー協会（以下 MFV とする）主催Ｂライセンス（Fussballtrainer B-Lizenz, 1986年10月）参加者の中の少年サッカー指導経験者を対象とした。

このように，日本，旧西ドイツ両国ともトップレベルから初心者レベルまで様々なクラスが対象となるように配慮した。

2. 対象者の分類

緒言で述べた目的のために以下の通り調査対象者を分類した。

1) 指導者

① ドイツ人57名

② 日本人66名

2) 少年

① ドイツ人少年114名

② 日本人少年403名

3. 調 査 時 期

1986年７月から９月にかけて調査を行った。

4. 調 査 方 法

調査は，質問紙法により実施した。旧西ドイツの対象者に対しては，1986 年７月に直接手渡し，回答は後日日本に郵送してもらう形式であった。日本の対象者に対しては，直接調査し，回

収してきた。調査紙の配布数は，指導者150，少年640，その内有効回答を得たものは，指導者123，少年517で，回収率は，指導者82.0%，少年は80.8%であった。

5. 質問項目

質問項目は，日本と旧西ドイツのサッカー組織，歴史，教育等の違いを考慮し，両国の文献，指導書，専門書及びサッカー指導者とのインタビューによって作成した。(巻末資料参照) これらの質問項目は，新たに両国の大学サッカー指導教官，サッカー専攻大学院生及び学生の評定によって内容的妥当性の検討が加えられ，その結果以下の項目が得られた。

1) 指導者用調査紙質問項目（資料1）

① 氏名

② 生年月日，年齢

③ 職業

④ 選手歴

⑤ 指導歴（指導経験年数）

⑥ サッカー指導者資格

⑦ 指導回数（同チームを1週間に指導する回数）

⑧ 指導時間（1回の練習時間）

⑨ 指導選手数（1回の練習時の選手数）

⑩ 一般的指導上の留意点

⑪ 指導上の目標

⑫ 技術的指導の強調点

⑬ 突破時における戦術的手段の強調点

⑭ 指導に対する報酬

2) 少年用調査紙質問項目（資料2）

① 氏名

② 年齢

③ サッカー歴

④ サッカーを始めた動機

⑤ 練習回数（1週間）

⑥ チーム以外での練習回数（1週間）

⑦ 練習時間（1回の練習）

⑧ 練習の楽しさ

⑨ 習得したい技術

⑩ 突破時における戦術的手段の選択

⑪ サッカーでの目標

⑫ サッカーの観戦

（ドイツ語質問紙は指導者用：資料3，少年用：資料4）

6. 回答方法

選択肢のある回答については必ず1つを選ぶように指示し，2つ以上の回答があった場合は無効とした。

尚，本研究では，調査項目全てではなく以下の項目を重点的に分析した。

1) 両国の指導量，練習量，指導選手数等を比較し，指導状況を把握する。
2) 両国の技術的向上における少年の願望と指導者の強調点について比較検討する。
3) 両国の突破時における戦術的手段の選択と指導者の強調点について比較検討し，日本の問題点を探る。

結果及び考察

指導状況

1) 練習頻度

図1は，1週間に行う練習の回数を表したものである。両国の分布には有意な差が認められた（$p<0.01$）。

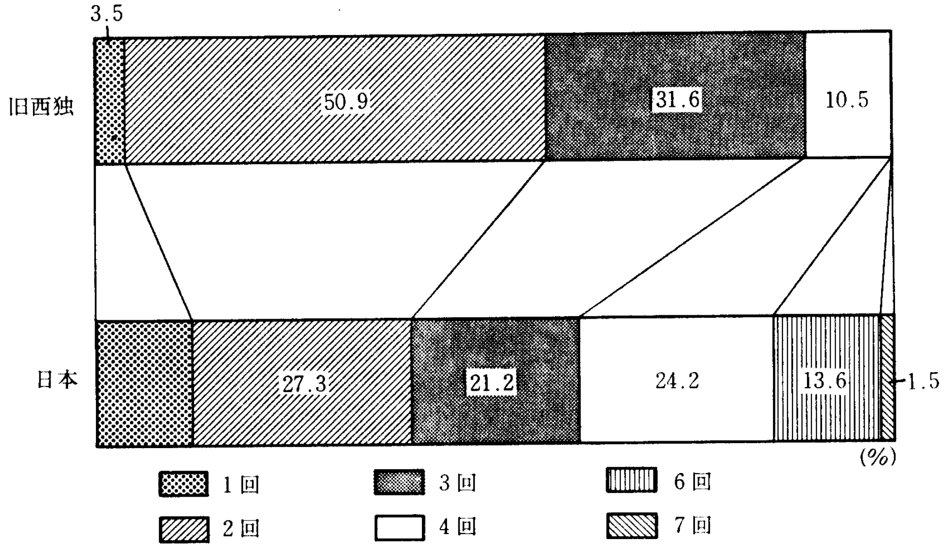

図1 練習頻度／週〔指導者〕

旧西ドイツの約90%の指導者は1週間に3回以下しか指導していないのに対し，日本の指導者は1回から7回までに分散している。少年においても両国とも同様の結果が得られた。全国サッカー少年団大会に参加した日本のトップレベルチームを対象に行われた調査では，指導者の40%が1週間に5日以上指導にあたっていると報告されている[14)]。旧西ドイツの少年対象者の中にも，トップレベルのチームが含まれているが，1週間に5日以上指導している指導者は1人の該当者もいなかった。

2) 練習時間

図2は，両国の1回当りの練習時間を表したものである。両国の分布には有意な差が認められた（$p<0.01$）。

旧西ドイツでは90分以内が90%を占めていた。日本も90分以内が51.5%であったが，2時間以上も16.7%と旧西ドイツの1.8%に比べて高い値を示した。大串らの報告によると，日本のトップレベルのチームの指導者の48%が2時間以上の練習をさせていると答えており[13)]，日本ではトップレベルのチームほど練習時間が長い傾向にあると考えられる。前項の練習頻度と同様に，練習時間が分散する傾向がみられた。大畠らは，練習日数と練習時間が多いほどスポーツ障害が発生しやすいと述べており[15)]，勝利のためだけに練習時間を増すのではなく，選手の将来を考えて障害が発生しないように，練習時間を考慮した指導が必要であると思われる。

3) 指導選手数

表1は，指導者1人に対する練習時の選手数である。両国の分布には有意な差が認められた（$p<0.01$）。

旧西ドイツの指導者は，1人に対して指導選手数20人以下が90%近くを占め，30人以上では1人の該当者もいなかった。松本は，『旧西ドイツの指導者は25人以上の選手は預からない』[9)]と報

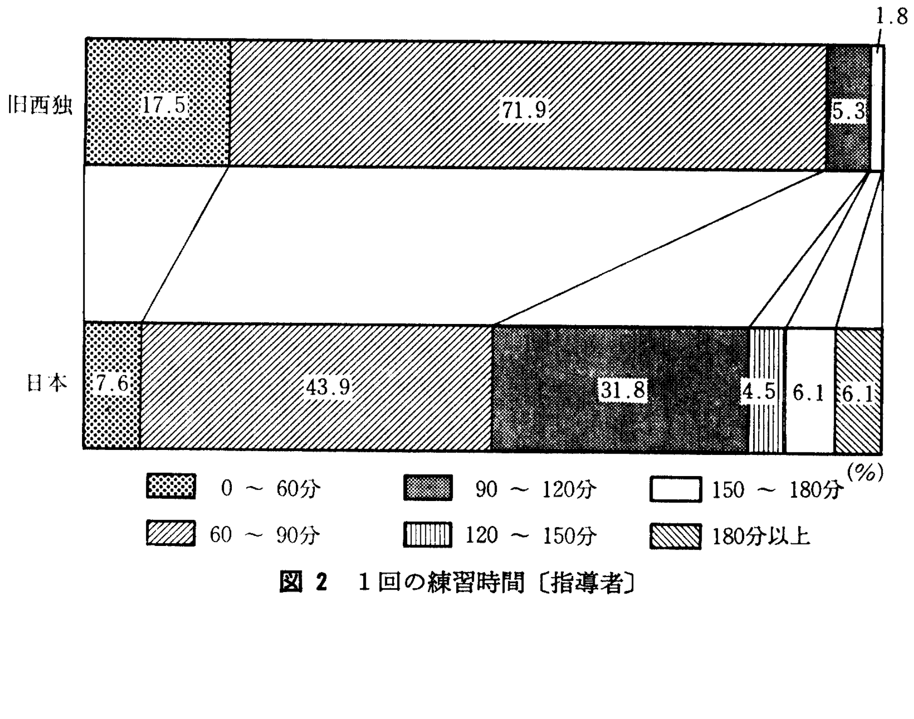

図2　1回の練習時間〔指導者〕

表 1　指導者１人に対する指導選手数

国＼人		~20人	20~30	30~40	40~50	50以上	TOTAL
旧西ドイツ	N	51	6	0	0	0	57
	%	89.5	10.5	0.0	0.0	0.0	100.0
日本	N	39	16	7	1	3	66
	%	59.1	24.2	10.6	1.5	4.5	100.0
TOTAL	N	90	22	7	1	3	123

告しており，本研究の結果とも一致した。日本でも，指導選手数20人以下が60%と一番高い値を示した。しかし,30人以上においても17%と,旧西ドイツと比べて高い数字を示した。最も高い選手数をあげた指導者は１人で90人であった。10歳から14歳にかけての時期は少年１人１人の身体的・精神的発達に大きな差が出てくる時期であり，少年指導において心身の発達に応じた技術，戦術の指導を行う必要があると考えられる。また，森本らは，『少年サッカー選手の障害を防ぐためには，練習の量だけではなく，指導者が１人１人に目の行き届く選手数で指導していかなければならない。』[10]と述べており，技術，戦術の指導とあわせて考え，指導選手数を決めていかなければならないと考えられる。

4)　技術的向上における少年の願望及び指導者の強調点について

図３は，少年がうまくなりたいと思っている技術について表わしたものである。両国の少年とも「ドリブルがうまくなりたい」と答えており，有意な差は得られなかった。

図４は指導者の技術的指導上の強調点を表わしたものである。両国の分布には有意な差が認められた（$p<0.01$）。

日本ではドリブルが42.4%と最も高い値を示していたが，旧西ドイツではドリブルは1.8%と

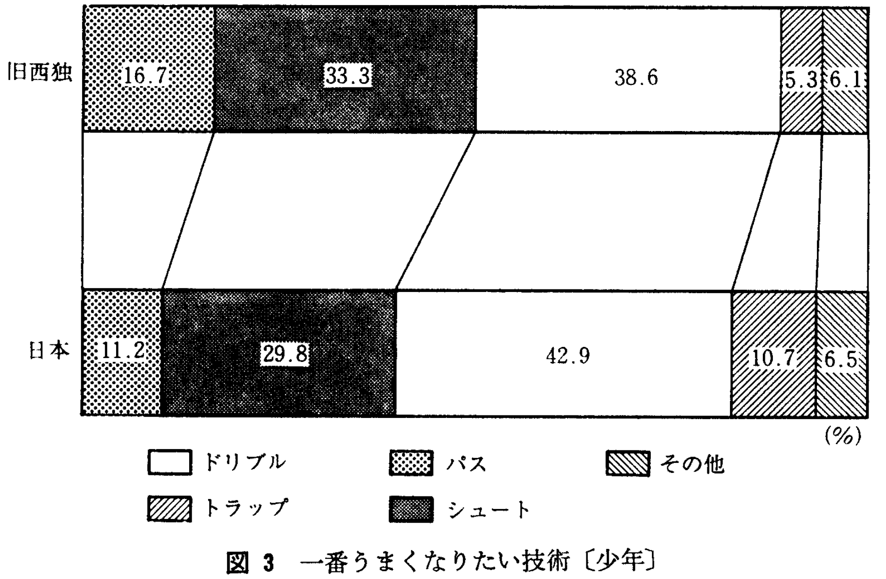

図 3　一番うまくなりたい技術〔少年〕

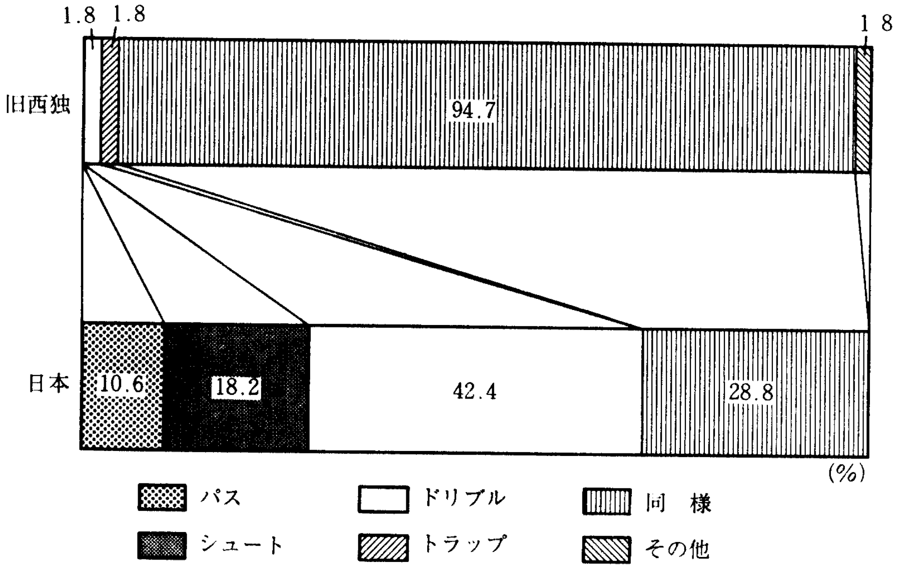

図 4　技術指導の強調点〔指導者〕

非常に低い値であった。逆に，94.7%が「全て同じように教える」と回答している。指導者がドリブルを特に強調していない旧西ドイツの少年達もドリブルを一番にあげている。『少年の頃にはどんな人でもドリブルの名手のプレーには心を踊らせるものである』と加藤[7]も述べているが，本研究においても同様の結果が得られた。これは，少年達は指導とは関係なくドリブルを指向する傾向があることを示している。

5）突破時における戦術手段の選択及び指導者の強調点

図5は，少年達が相手を突破する時どのような戦術的手段を用いるかについて示したものである。両国の分布には有意な差が認められた（$p<0.01$）。

日本ではドリブルが69.0%と最も高く，壁パスは16.9%と低い値を示したが，逆に，旧西ドイ

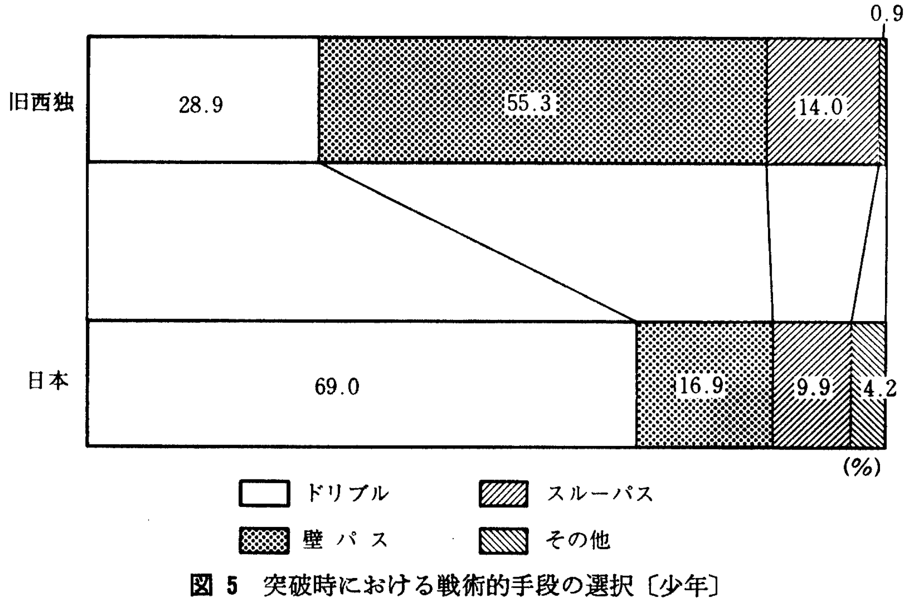

図 5　突破時における戦術的手段の選択〔少年〕

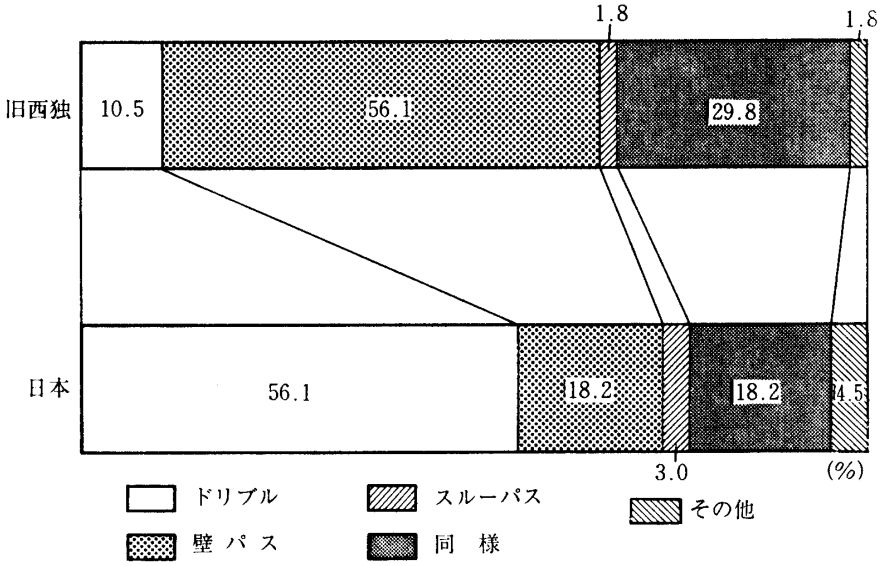

図 6 突破時における戦術的手段の指導上の強調点〔指導者〕

ツは，壁パスが55.3％と最も高く，続いてドリブルが28.9％であった。旧西ドイツの少年達は，「一番うまくなりたい技術」（図３）では，ドリブルが38.6％と最も高い値を示したにもかかわらず，戦術的意識においては壁パスを指向する傾向にある。図６は指導者の突破時における戦術的指導の強調点について表したものである。両国の分布には有意な差が認められた（$p<0.01$）。

旧西ドイツの指導者は壁パスが56.1％と高い値を示しており，それが少年達によく反映されていることが確認できる。日本の指導者は戦術的強調点においてドリブルが56.1％と一番高い値を示しており，それが少年達の戦術的意識に現れていることがわかる。すなわち，少年に対する指導の影響力は非常に大きいということが示唆される。Breitner は，『日本の少年が戦術的能力に欠け，特に攻撃におけるサポートが不足している。』[2]と述べている。また，田中は，『日本の選手の相手をつけた状況下における判断力は，世界のレベルと比較して，最も劣っている。』[18]と述べている。富岡は，日本の少年トッププレーヤーを対象とし，技術，体力，戦術，精神面，チームワークの５つの要素の中で，戦術に対する評価が低かったと報告している[20]。日本代表を筆頭に戦術面での遅れを指摘されているなかで，これからの日本サッカーを築いていく少年達が戦術に対しての評価が低いということは，指導において問題があるのではないかと考えられる。

一方，低年齢からドリブルを指導することの重要性について述べている報告もあるが，サッカーの技術は戦術と結び付いて存在するものであり，試合場面の要求に充足する手段として指導していく必要があると考えられる。

加藤は，少年向け指導書の中で，『ドリブルは，むやみやたらに使うものではなく，前線にフリーな味方がいたら，素早くパスした方が味方の攻撃が有利になる。』[7] Csanadi も，ドリブルの重要性を認めた上で，『サッカーで必要なのは，スピードであって，ドリブルは，すばやく正確なパスやトラップにその地位を奪われていく。』[3] と述べている。したがって，日本の指導者がド

リブルを中心に教えていることが，田中，Breitner の指摘した，日本の選手の戦術眼の低さ，攻撃時のサポートの不足の要因になっていると考えられる。ドリブルで敵を突破することはチームにとって非常にプラスになる。ボールを持っている選手よりも有利なポジションに選手がいても，パスをせずドリブルで突破してしまえば，1対1という小さな局面においては成功である。ここで，戦術的失敗を犯しているにもかかわらず，指導者はドリブルで突破したことに対する賞賛は与えるが，戦術的ミスを犯したことに対しては指摘しないということもある。このために戦術的ミスに対するフィードバックが行われず，この繰り返しによって戦術的能力が開発されないと考えられる。技術的ミス，例えばシュート，ドリブル等の失敗は少年達自身が確認できる。しかし，前述した戦術的判断のミスを少年達自身は気が付かないことが多い。指導者は少年の戦術的判断のミスを的確に把握し，指摘していく必要があると考えられる。少年期のサッカーにおいては，身体的，技能的発達の個人差が大きく，能力の高い選手は1人で突破し得点することが可能である。しかし，高校，大学，日本リーグとレベルが上がっていくと，1対1の守備力及びカバーリングなどの組織的守備力も高度となり，1人の選手がボールを持ち何人もの相手を突破してシュートすることは困難になると考えられる。

少年サッカーで国際試合のような戦術的指導をする必要はないが，その基礎となる技術及び戦術は身に付けさせなければならない。指導者は試合の中で，どのような技術，戦術が必要であるのか，その技術，戦術の使い方を選手に理解させ，サッカーの目的（ゴール）のためプレーさせるよう指導しなければならないと考えられる。

結　論

以上のことから，主に，次のことが明らかになった。

1) 日本は，練習頻度・練習時間が分散する傾向にあり，少年にとっての最適の練習頻度・練習時間を定めることの必要性が示唆された。旧西ドイツと比較して日本では練習量が多い傾向にあり，勝利のためだけではなく，スポーツ障害の予防，少年の将来を考えた指導を行っていく必要があると考えられた。

2) 日本は，指導者1人当りの指導選手数もチームによって分散しており，技術・戦術指導の効率及び徹底を考え，最適指導人数を定める必要があると考えられた。

3) 技術指導において，日本の指導者はドリブル中心の指導を行っている。また，戦術面においても，ドリブルでの突破を中心に指導している。ドリブルでの突破だけではなく，壁パス，スルーパス等バランス良く指導する必要があると思われた。

4) 以上の3項目を実践するためには，指導者資格制度の充実が必要であると考えられる。そこで，日本のサッカーがより発展するためには指導者養成を，底辺を支えている少年サッカー

の指導者にも普及，徹底させなければならないと考えられた。

引用・参考文献

1) Bisanz. G., H. Koppel, H. Osieck, B. Vohts, "Fussball-Lehrplan 2 Kinder und Jugendtraining Grundlagen" BLV Verlagsgesellschaft : 1985.

2) Breitner. P.,「我がドイツ・サッカー，これからのサッカー」Fussball, 4 : 1986.

3) Csanadi. A.,「チャナディのサッカー―技術・戦術編―」村岡博人訳，ベースボール・マガジン社，1982，p. 396.

4) Heddergott. K. h., " Neue Fussball-Lehre ", Limpert Verlag : 18, 1987.

5) 乾　真寛，田村　修「サッカーの試合におけるダイレクト及び２タッチプレーに関する一考察」第36回日本体育学会：649，1985.

6) 磯川正教，大橋二郎，大串哲朗「ヤング・フットボーラーの技術分析」昭和52年度ヤング・フットボーラーに関する調査報告書：83-92，1978.

7) 加藤　久「サッカー入門」金園社，1986，p. 102.

8) 加藤　久「サッカー　基本プレーと勝つための攻防テクニック」1986，p. 57.

9) 松本育夫「サッカー　西ドイツにおけるユース，ジュニア選手育成についての研修」スポーツ指導者在外研修事業研修報告書：24-29，1983.

10) 森本哲郎，大畠　襄，高木俊男，池田舜一，鍋島和夫，塩野　潔，深谷　茂，若山待久，河野照茂「サッカーによるスポーツ障害　―膝関節の障害―」J. J. SPORTS SCI., 2-11 : 848-855，1983.

11) 武藤芳照「スポーツ少年の危機」朝日新聞社，

12) 中嶋寛之「発育期のスポーツによる膝関節損傷の発生機転について」整形・災害外科，24：1605-1610，1981.

13) 大串哲郎，小宮喜久，赤井岩男，高橋孝太郎「ヤング・フットボーラーの実態調査―特に指導者，指導上の問題を中心に―」昭和50年度ヤング・フットボーラーに関する調査報告書：2-59，1976.

14) 大串哲郎，小宮喜久，田代力也，深倉和明「ヤング・フットボーラーの実態調査―特に指導者，指導上の問題を中心に―」昭和50年度ヤング・フットボーラーに関する調査報告書：1-24，1977.

15) 大畠　襄，鍋島和夫，堀田哲爾，藤田一郎「座談会 "スポーツ障害なしの少年サッカーを目指した"」J. J. SPORTS SCI., 2-11 : 864-880，1983.

16) Rollgenn. K., " Das Protokoll vom B-Lizenzlehrgang.", M. F. V., 9-10，1985.

17) 佐藤　宏「スポーツ障害」杏林書院，1973.

18) 田中純二「子どもが戦術，戦法から学ぶもの」体育科教育，31-4：71-73，1983.

19) 田中和久「サッカーの戦術」不昧堂出版，1981，p. 21.

20) 富岡義雄「小・中学校サッカー選手に対するアンケート調査の結果について―過去３年間のまとめ―」昭和57年度科学研究部報告書㈶日本サッカー協会：60-71，1983.

資料 1.

サッカー指導者に関する調査

(氏名は任意にお書き下さい。選択肢のある項目では1つだけ選んで下さい。)

1. 氏名　　　　　　　2. 生年月日　昭和　年　月　日生　歳

3. 職業

4. 選手歴

1) 全日本代表であった。　2) 日本リーグでプレーした。
3) 国体に出場した。　4) 大学，高校でサッカー部に所属した。
5) サッカー経験なし　6) その他（　　　　）

5. 何年間少年サッカーを指導されていますか。

年　ケ月

6. サッカー指導者資格をお持ちですか。

1) 上級コーチを持っている。　2) 公認コーチを持っている。
3) リーダー資格を持っている。　4) 今後取るつもりである。
5) 取るつもりがない。

7. 1週間に何回子供達を指導していますか。

回／週

8. 1回の練習時間はどれくらいですか。

約　時間　分

9. 1回の練習で何人の選手を指導していますか。

約　人

10. 一般的指導上の留意点

1) サッカーを通して社会性を養っている。
2) サッカーを通して健康なからだをつくる。
3) サッカーの楽しさを教えている。
4) その他（　　　　）

11. 指導上の目標

1) リーグ戦，トーナメントに勝つことである。
2) 良い選手を育てることである。
3) 楽しく，仲良くさせることである。
4) その他（　　　　）

12. 技術的指導で一番強調しているものは何ですか。

1) パス　2) シュート　3) ドリブル　4) トラップ
5) 全て同じように強調している。　6) その他（　　　）

13. 突破の手段として一番強調していることは何ですか。

1) ドリブル　2) 壁パス　3) スルーパス
4) 全て同じように強調している。　5) その他（　　　）

14. あなたはサッカーの指導に対しての報酬を得ていますか。

1) 得ている。　2) 全く得ていない。　3) 実費だけは得ている。

資料 2.

少年サッカー選手に関する調査

（1つの質問には1つだけ答えを書いて下さい。）

1. 氏名　　　　　　　　2. 生年月日　昭和　年　月　日生　歳

3. サッカーを始めて何年になりますか。

年　ケ月

4. どうしてサッカーを始めたのですか。

1) 両親にすすめられて。　2) 先生，コーチにすすめられて。
3) 兄弟や友達がしていたから。　4) サッカーが楽しそうだから。
5) サッカー選手達がかっこいいから。

5. あなたは1週間に何回練習をしますか。

1) 1回　2) 2回　3) 3回　4) 4回　5) 5回
6) 6回　7) 7回

6. あなたはクラブの練習のほかにサッカーをしますか。

1) いつもよくしている。　2) よくしている。
3) ときどきしている。　4) あまりしない。

7. 1回の練習時間はどれくらいですか。

1) 30分　2) 45分　3) 1時間　4) 1時間15分
5) 1時間30分　6) 1時間45分　7) 2時間～

8. 練習はいつも楽しいですか。

1) いつも楽しい。　2) 楽しくないときもある。
3) ときどき，楽しい。　4) あまり楽しくない。

9. 技術的に一番うまくなりたいことは何ですか

1) パス　2) シュート　3) ドリブル　4) トラップ
5) その他（　　　　　　）

10. 相手を抜くときに一番使うものは何ですか。

1) ドリブル　2) 壁パス　3) スルーパス
4) その他（　　　　　　）

11. あなたのサッカーでの目標は何ですか。

1) プロサッカー選手になること。
2) リーグ戦，トーナメントで優勝すること。
3) チームでレギュラーになること。
4) 友達と仲良くサッカーができればいい。
5) その他（　　　　　　）

12. あなたは，どれくらいサッカーの試合を見にいきますか。

1) よく，競技場やサッカー場へ見にいく。
2) テレビの試合はよく見る。
3) ときどき，テレビの試合を見る。
4) ほとんど見ない。

どうもありがとうございました。

資料 3.

Fragebogen für den Fussballtrainer

(bitte geben Sie auf jede Frage nur eine Antwort)

1. Name : ______________________(freiwillig) 2. Geb. Datum______________
3. Beruf : ____________________
4. Bitte nennen Sie die hochste Klasse, die Sie in Ihrer bisherigen Laufbahn erreicht haben :
   ( ) Nationalspieler ( ) Bundesliga ( ) Oberliga ( ) Verbandsliga
   ( ) landesliga ( ) Bezirksliga ( ) Kreisliga ( ) Sonstiges :______
5. Wie lange sind Sie schon als Trainer tatig ?
   Seit_____Jahr(en).
6. Haben Sie eine Fussballtrainerlizenz ?
   ( ) Fussballehrerlergang ( ) A-Lizenz ( ) B-Lizenz
   ( ) ich habe vor, eine zu erlangen ( ) ich brauche keine.
7. Wie oft trainieren Sie in der Woche ? _____mal/Woche.
8. Trainingsdauer pro Einheit : _____Std. _____Min.
9. Wieviel Spieler trainieren Sie im Training ? __________spielers
10. Was mochten Sie den Kindern durch das Training vermitteln ?
    ( ) soziale Verhalten ( ) gesunde Korper
    ( ) Freude am Fussball ( ) Sonstiges : ________________________
11. Bitte nennen Sie das Ziel Ihres Trainings.
    ( ) Die meisterschaft gewinnen
    ( ) gute Spieler ausbilden
    ( ) freudschaftliche Beziehungen knupfen
    ( ) Sonstiges : ________________________________
12. Worauf legen Sie den technischen Schwerpunkt Ihres Trainings ?
    ( ) Passe ( ) Torschiessen ( ) Dribbling ( ) Ballannahme
    ( ) alles gleichgewichtig ( ) Sonstiges :_________________________
13. Nennen Sie bitte die nach Ihrer meinung beste Möglichkeit mit dem Ball am gegenerischen Spieler vorbeizukommen :
    ( ) Dribbling ( ) Doppelpass ( ) Steilpass
    ( ) Sonstiges : ________________________________
14. Haben Sie ein bestimmtes Einkommen vom Verein ?
    ( ) Ja ( ) Nein
    ( ) Ja, aber nur Unkostenerstattung (Fahrgeld, Sportzeug u. s. w.)

bitte unbedingt ausfullen, wenn Sie “Sonstiges” angekreuzt haben.

Vielen Dank.

Die Auswertung dieser Untersuchung dient einer Universität in Japan zu Forschungszwecken. Die Daten werden nicht an Dritte weitergegeben.

資料 4.

Fragebogen für die Jugendlichen Fussballspieler

(bitte pro Frage nur eine Antwort ankreuzen)

1. Name : ______________________ 2. Geb. Datum : ____________________
3. Seit wann spielst Du Fussball ?
   Seit : _____ Jahr(en)
4. Warum hast Du angefangen Fussball zu spielen ?
   ( ) Weil Deine Eltern es empfohlen haben.
   ( ) Weil Dein Trainer es empfohlen hat.
   ( ) Weil Deine Bruder und Freunde gespielt haben.
   ( ) Weil Du dich dafür interessiert hast.
   ( ) Weil du wie ein Bundesligaspieler spielen mochtest.
5. Wie oft trainierst Du in der Woche ? (bei dem Verein)
   ( ) 1x ( ) 2x ( ) 3x ( ) 4x ( ) 5x ( ) 6x ( ) 7x
6. Wie oft spielst Du ausserhalb des Vereins ?
   ( ) sehr oft ( ) oft ( ) manchmal ( ) nie
7. Wie lange dauert ein Training ?
   ( ) 30 Min. ( ) 45 Min. ( ) 1 Std. ( ) 1 Std. 15 Min.
   ( ) 1 Std. 30 Min. ( ) 1 Std. 45 Min. ( ) 2 Std.
8. Macht das Training Spass ?
   ( ) Ja, immer ( ) Ja, oft ( ) Ja, manchmal ( ) nein
9. Was mochtest Du besser können ?
   ( ) Passe ( ) Torschiessen ( ) Dribbling ( ) Ballannahme
   ( ) Sonstiges : ______________________________
10. Wie kommst Du am besten mit dem Ball am Gegner vorbei ?
    ( ) Dribbling ( ) Doppelpass ( ) Steilpass
    ( ) Sonstige Vorschlage : ______________________________
11. Was ist Dein Ziel ?
    ( ) Profispieler zu werden. (Bundesligaspieler)
    ( ) Die Meisterschaft zu gewinnen.
    ( ) Stammspieler zu werden.
    ( ) Spass mit Freunden zu haben.
    ( ) Sonstiges : ______________________________
12. Wo schaust Du Fussballspiele ?
    ( ) auf dem Fussballplatz
    ( ) nur im Fernsehn
    ( ) manchmal im Fernsehn
    ( ) gar nicht

Vielen Dank.